

笛吹市探訪シリーズ 第4回 石和地区

水と太陽

百年ほど昔（明治40年）に石和は大水害を被り甚大な被害を出したことはよく知られています。町の大部分が流され、砂礫に埋まってしまいました。文化的・歴史的な地上の構造物はもちろん、数多くの歴史的な文書も失われたと思われま

す。しかし、笛吹市の他の地域に比べ文化財は多くはありませんが、石和の重要な歴史的な位置は変わりません。

千数百年前から、石和は石禾、伊沢、石沢などと書かれることがありました。『三代実録』という千年以上前に書かれた文献には「嘉禾かか（素晴らしい稲あるいは粟）が山梨郡石禾で収穫された」という記録があります。

「石」の音イシはヨシ（嘉）が転化した可能性があるため、以前から高い収穫を上げる地域として名が知られていたのでしょう。

『三代実録』には「十三茎に五十穂、十二茎に四十六穂」

とあり、1本の茎に4穂前後が穂ったことになりました。通常稲は1茎に1穂、だから禾は粟だったかもしれませんが、それにしても13茎、12茎というのとは当時にあつては株が立派だったことを示します。これは



適切 な成長過程で根元に十分な水（と養分）、太陽の光が与えられたということなのです。

一宮町の松原遺跡の竪穴住居から出土した素焼きの深皿型土器（つぎ）には「石禾」「東」や「東」「石禾」と墨書きされたもの（ぼくしよどき）がいくつか

ています。「石禾」という地名で誰（あるいは何の施設）を、あるいは何の用途を表しているのでしょうか。素焼きの土器は廉価で広く普及しましたが、一般庶民が文字を読めたとは考えられないので、ごく限られた集団の中で使われたでしょう。本当は器の中の「中身」が重要だったのかもしれませんが。

地名は文化財だ、と言われる。歴史や意味を背負っているからです。しかし意識して伝える努力をしないと利便性ばかり追求され、画一的なものに変えられてしまう危険性があり、平成の大合併は研究者に危機感をもたらしています。往時の地形、動植物、伝承そして地域の歴史を分かちやすい言葉、粹な言葉に託して伝えてくれた私たちの先輩たちに感謝。

今回は釈迦堂遺跡博物館からです。

笛吹市教育委員会 社会教育課